(II) 個別研究

山形県の川崎病実態調査について

山形大学医学部　小児科　佐藤　哲雄、秋場　伴晴、芳川　正流、大滝　晋介、木野田昌彦

1977年から1982年までの6年間に山形県において発生した川崎病について県内の主要な病院の協力を得てその実態調査を実施するとともに、主として私達の施設で超音波断層エコー法および選択的冠動脈造影法を施行し冠動脈病変の検索を行なった。

ここにその実態調査結果の概略を報告するとともに、本症の予後を左右する要因である冠動脈病変の経時的変化について述べる。

(1) 年度別患者数について

山形県における川崎病の年度別患者発生数をみると1981年には平年の4倍にも達する著明な増加を示し、さらに1982年にも平年の2倍の多発を見た。

このような多発は1981年7月から翌年1月にかけて起っており全国的流行に先がけて見られたことは注目すべきであろう（図1）。

なお、同朋発生は11例（2.2％）、死亡は2例（0.4％）、男／女　比は1.30であった。

(2) 地域別発生について

調査期間中における山形県内の地域別発生頻度を9才以下の小児人口10万人あたりについて検討したと結果、1981年の村山地区と1982年の最上地区に多発傾向が見られた（表1）。

(3) 冠動脈病変の合併について

この期間に発生した508名の川崎病患者のうち88名（17.3％）に発症後平均6カ月後に選択的冠動脈撮影が行なわれた結果、43名（8.5％）に"冠動脈りゅう"の合併が認められた（表2）。

(4) 冠動脈病変の経時的変化について

初回造影で冠動脈病変の見られた患者のうち26名に対して更にその約1年に2回目の造影を施行したところ、半数の13名の冠動脈りゅうは造影所見上全く消失し正常化しており、他の9名ではやや縮小を認め、2名では縮小とともに新たに縮　が出現しており、残の2名では全く変化が認められなかった（表3）。そこでこれらを冠動脈りゅう消失群と異常残存群とに分けそれぞれの初回造影時の冠動脈りゅうについて、最大動脈りゅう内径／動脈りゅう近位部正常冠動脈内径の比を比較してみた結果、前者が著しく低値であった（図2）。すなわち初回造影時に冠動脈りゅうの小さい方が比較的短期間に消失し正常化することが判明した。

図1.　1977年から1982年までの年次別、月別発生数

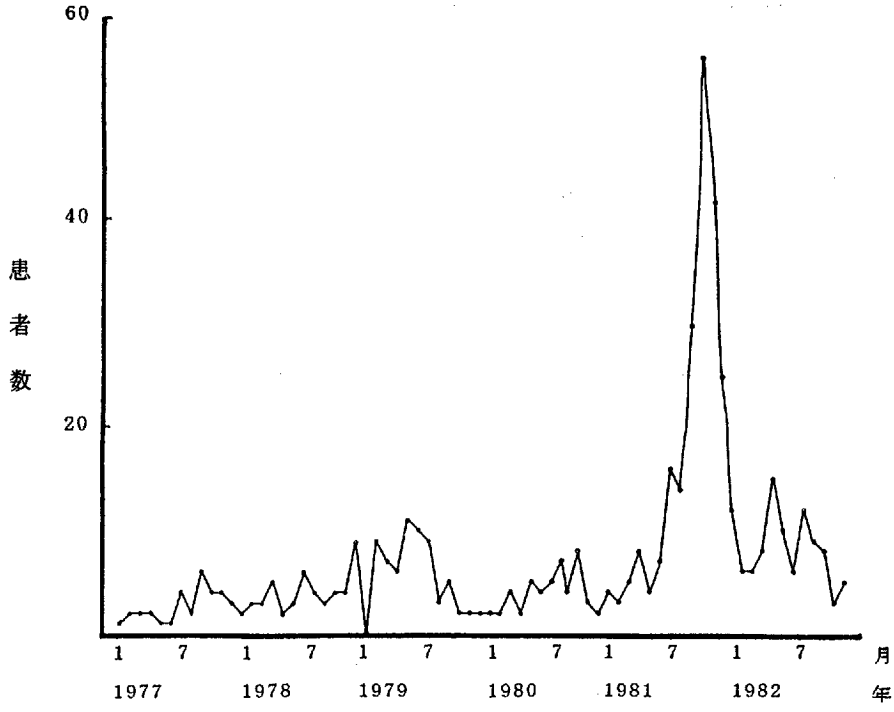


表1.　地域別、年次別の発生率（9歳以下の人口10万対）

地域＼年次	1977	1978	1979	1980	1981	1982
置賜	25.8	31.6	40.2	23.0	103.3	37.3
村山	10.0	36.2	48.7	27.5	157.2	48.7
最上	20.0	33.3	26.6	33.3	53.2	113.2
庄内	25.1	6.3	18.8	27.2	92.1	64.9
全県	18.0	27.0	37.1	27.0	120.4	56.3

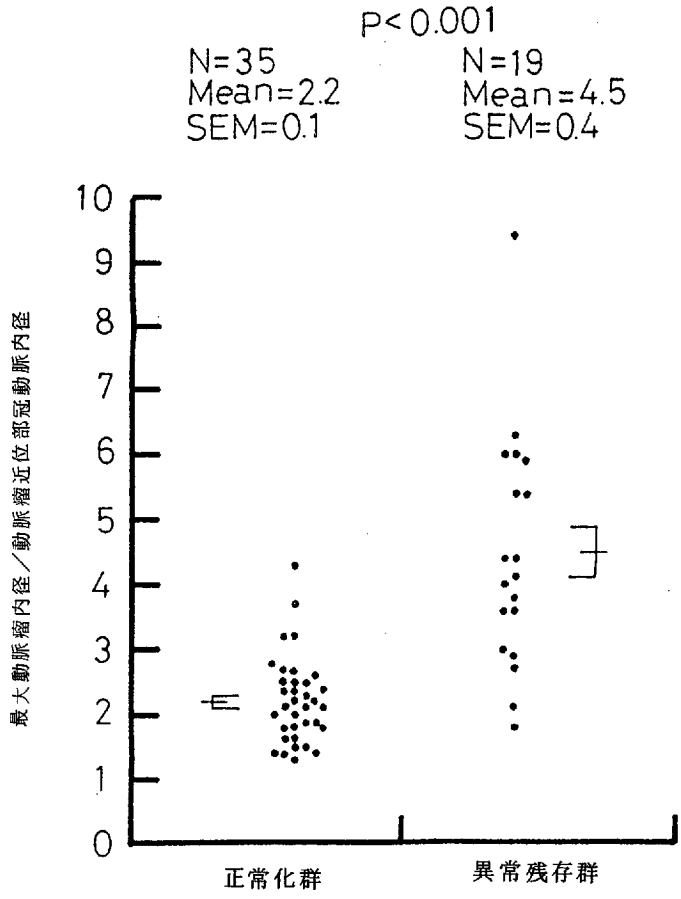
表2.　冠動脈造影の実施状況

年次	1977	1978	1979	1980	1981	1982	合計
発生数	32	48	66	48	214	100	508
施行数	8	9	9	12	36	14	88
施行率（%）	25.0	18.8	13.7	25.0	16.8	14.0	17.3
異常例数	2	0	3	9	21	8	43
異常例の頻度（%）	6.3	0.0	4.5	18.8	9.8	8.0	8.5

表 3. 冠動脈造影による冠動脈病変の経過

初回造影		2回目造影		
動脈瘤 拡張) 26例	正常化	13例		
	縮小	9例	不変	
	縮小＋狭	2例	縮小＋閉塞	
			不変	
	不変	2例		

図 2



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

1977 年から 1982 年までの 6 年間に山形県において発生した川崎病について県内の主要な病院の協力を得てその実態調査を実施するとともに、主として私達の施設で超音波断層エコー法および選択的冠動脈造影法を施行し冠動脈病変の検索を行なった。
ここにその実態調査結果の概略を報告するとともに、本症の予後を左右する要因である冠動脈病変の経時的変化について述べる。